群馬大学

研究協力校（課程又は障害種）

・群馬大学教育学部附属特別支援学校（知的）

研究の成果

観点１：
各モデル事業内、及び近隣自治体間における概念（用語）の共通理解・合意形成

１．　図書館機能の利活用

図書館機能の利活用や読書活動が必ずしも十分とはいえない知的障害特別支援学校において、図書館機能を利活用した授業や読書活動の充実をはかることで、言語能力や情報活用能力を育成することについて検討する。言語能力や情報活用能力を育成するために、３つの学校図書館機能である、読書センター機能、学習センター機能、情報センター機能の計画的な利活用をはかり、読書活動の充実を目指す。

小学部国語科における交流及び共同学習をはじめとした発達段階に応じた学習と図書館の利活用とを結びつけることで、児童生徒の言語能力を継続的に育成することを目指す。また、小学部から高等部までの発達段階に応じた実践を一つのモデルとしてまとめるとともに、特別支援学校において今後求められる図書館機能や利活用の可能性について検討している。

観点２：
教育課程・個別の指導計画の実施状況とその評価

2.　図書館機能の授業への取り入れ

小学部から高等部までの発達段階に応じて、図書館機能の拡充と計画的な利活用を軸とし、各教科等の学習や学校生活全体を通した活動とを関連づけ、授業改善ひいては教育課程の改善へと結びつけることで、児童生徒の豊かな学習活動と読書活動の充実につなげ、言語能力を継続的に育成している。

各学部において図書館機能を活用した授業実践や読書活動を取り入れ、実践をとおした児童生徒の変容について見取りを中心に評価を行った。変容に関しては単元内だけでなく、日常生活でも見受けられ、図書館の利用数の増加や児童の語彙の広がりが見受けられた。

平成 30 年度の取組を基に、令和元年度からは、図書館機能の利活用や読書活動を取り入れた実践を学校の教育課程に位置付けることで、組織的かつ計画的に実施できるようにしていくことを確かめた。

主体的・対話的で深い学び、カリキュラム・マネジメントを意識して事業を行っており、これらの意識により、読書活動を通して児童生徒の興味や関心の高まりとともに、主体的に学習する姿を引き出すことができている。

観点３：
個のニーズにあわせた指導法、学習環境・支援の工夫

3.　図書館機能を活用した学習の支援方法と効果

自作の大型絵本や学習に用いた成果物等の掲示を行った（資料Ⅰ－１）。また、特別支援学校の児童生徒にとって、視覚的な支援が有効であることが多いことから、マルチメディア図書や書画カメラ、タブレット端末を活用している（資料Ⅰ－２，Ⅰ－３）。支援機器などを用いる際には個々の児童生徒に合わせて、児童生徒にとって扱いやすいことが重要であることが考えられた。これらを用いることにより、主体的に学習に取り組む姿を引き出すことができ、授業のねらいや個々の学習のねらいに応じた学習活動が展開することができた。

文字を読むことに困難さがあっても、個のニーズに合わせて、音声と視覚的効果によって本を読むことができている。これにより、内容の楽しさを共有したり、個々のペースでじっくりと本を読んだりできるなどの学習効果を確かめている。こうした機器を活用し、その効果を検討していくことは、知的障害特別支援学校における図書館の「読書センター」と「学習センター」としての機能の強化につながることが考えられる。

資料Ⅰ－１　大型絵本の作成

資料Ⅰ－２　タブレット端末で写真や音声を再生

資料Ⅰ－３　書画カメラを用いて絵本を拡大表示

観点４：
障害のない幼児児童生徒・地域社会との交流及び共同学習の設定

4.　図書館機能を活用した地域との交流、学習

図書館機能を活用して、小学部においては国語科を中心とした小学校との交流及び共同学習、中学部と高等部においては国語科を中心とした学習を幼稚園のインターンシップや地域での学習活動に生かすことを中心とした授業を実施し、言語能力の育成をはかった。

各部の授業実践をとおして、読書への興味や関心の広がり、コミュニケーション能力の高まりといった明らかな児童生徒の学習意欲や言語能力の変容を確かめることができた。このような実践について年間をとおした取組とすることが、交流及び共同学習においても、両校児童の言語能力の育成につながることを確かめた（資料２-１，２）。

資料２-１　読書への興味や関心

資料２-２　児童が読み聞かせを行う様子

高等部生徒が作業学習において、学校近隣地域の人と公園にどんな花を植えるかを相談する学習活動を実施した際、地域の方にも喜ばれる花を植えようという目的意識が明確となり、主体的に花の種類を調べて情報を得ようとしたり（資料３－１）、花壇での花の並べ方を考えたりする姿が見られた（資料３－２）。

群馬大学教育学部附属特別支援学校の学校研究の取組では、近隣の中学校と作業学習をしたり、農業学校で一緒に野菜を植えたり、自然素材のクラフトを作ったりといった地域での活動が行われており、今後の事業の活動につながることが考えられた。

資料３－１　季節の花を調べる

資料３－２　調べた情報から花壇での花の並べ方を考える

観点５：
多面的な視点からの学習評価・授業評価・学校評価の実施

5.　公開授業や教育研究会による外部からの評価

連絡帳や読書カードのやり取り、通知表のコメントなどで児童生徒の変化をうかがうことができている。児童の保護者から、児童の本を読む回数が増えたといった報告があり、本事業に対してありがたいと評価を受けている。

また、以前から他大学附属の学校との連携がとられており、実践報告の冊子等のやりとりが行われ、県外からの評価を得ている。

次年度以降に、県立図書館との連携を予定しており、今後の活動において学校外での多面的な視点からの評価が期待される。

観点６：
新学習指導要領に対応した特色ある取組

6.　附属小学校保護者ボランティアによる「読み聞かせの会」

図書館や本を介した交流、読書活動の広がりを目的として、附属小学校保護者ボランティアによる「読み聞かせの会」への参加を始めている。この参加をとおした教員並びに保護者の観察によって、「徐々に絵本の世界に入り込むように、読み手の声やページに集中して聴く姿が見られるようになった」「次のページを楽しみにするようになった」「おもしろさを隣の友だちと共有するように笑いかける姿が見られるようになった」等、児童の絵本を読むことへの集中力の高まりや障害の有無にかかわらず、児童が読書を楽しむ姿への変容を確かめることができた。この参加により、群馬大学教育学部附属特別支援学校の児童のみを対象とした読み聞かせの機会を設けていくことの提案が生まれ、「読み聞かせの会」への参加をとおした、さらなる児童生徒・保護者の変容が期待されている。

資料４　「読み聞かせの会」